

A・MUSEUM

vol.83
[2015.6.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



朽ち木の中にすむオオゴキブリ (撮影：今井初太郎)

森にくらすオオゴキブリ

ゴキブリと聞いてその黒光りしたからだと素早い動きから背筋を凍らせる方も多いと思います。ゴキブリのなかまは世界に約3,700種も記録されており、日本には50種以上が分布しています。じつは、そのほとんどは人間の生活と無縁な森の中において、害虫扱われているゴキブリはわずか1%程度（日本では6種）に過ぎません。

森にくらすゴキブリの一種であるオオゴキブリは、大きいもので体長4cmにもなる大型のゴキブリです。樹木の腐った部分に穴を掘ってくらしています。食べ物は腐って柔らかくなった木材で、成虫、幼虫とも消化器官内に生息する微生物が木材の繊維の消化を助けています。オオゴキブリは、森の朽ち木を分解して大地に戻し、新しい植物が芽生える土壌をつくる働き者です。(教育課 潮田好弘)



翅がまだ生えていないオオゴキブリの幼虫

第63回
企画展

葉っぱ展 –個性豊かな葉っぱとその恵み–

Leafy Secrets: The Diverse Lives of Leaves

みなさんは、「葉っぱ」と聞くとなにを連想するでしょうか。美しく紅葉するモミジ、小さくてかわいらしい四つ葉のクローバー、サラダの中に入っているレタスやキャベツ、焼き芋をつくるために掃き集めた大量の落ち葉など連想するものはさまざまです。つまり、葉っぱはどこにでもある身近な存在なのです。

私たちの身の回りにはたくさんの種類の植物があり、当然その数だけ葉っぱの形状も異なります。大きい葉っぱ、小さい葉っぱ、とげのある葉っぱ、やわらかい葉っぱ、ピロート状の葉っぱ、においのある葉っぱなど本当にさまざまです。さらに四季の変化が豊かな日本では、同じ種類の木であっても季節ごとに葉っぱの色も表情も大きく変化します。

本企画展では、普段は身近にありすぎてあたりまえの存在としてみられがちな葉っぱに焦点を当て、まず、そのひとつひとつの葉っぱの形や大きさ、美しさや興味深い特徴などを紹介します。次に、「葉っぱの生い立ち」のコーナーで、最古の葉っぱ、恐竜が食べていた葉っぱなどの化石を展示しながら葉っぱの進化について紹介します。「葉っぱのつくりとはたらき」では、小中学校で学習した内容を思い出す方もいらっしゃるかもしれません。顕微鏡をのぞきながら、微細な葉っぱのつくりについて知る展示を設置する予定です。そ

のほか、「葉っぱと生きものとの関係」では昆虫と葉っぱの関係、食虫植物の不思議な生態などを紹介するほか、人との関わりなど葉っぱから得られる恩恵や葉っぱの利用についても考えてみたいと思います。

この機会にじっくりと一枚の葉っぱと向き合ってみませんか。企画展示室中央ではミニ葉っぱ体験コーナーを用意しています。日替わりのメニューで楽しめるコーナーとなっております。ぜひ夏休みを利用してご家族でご参加ください。（教育課 小泉直孝）

展示構成

- 1：葉っぱの多様性
 - ・形いろいろ
 - ・色いろいろ
 - ・大きさいろいろ
 - ・世界のめずらしい葉っぱ 等
- 2：葉っぱの生い立ち
- 3：葉っぱのつくりとはたらき
- 4：葉っぱと生きものとの関係
- 5：葉っぱと人との関わり
- 6：葉っぱの今 そして未来へ



若葉の美しいブナの葉っぱ



大きな葉っぱ ココヤシ

会 期 **2015年7月4日(土)**
～**2015年9月23日(水・祝)**

7月4日(土)は午後1時からの公開となります。
開館時間 9:30～17:00 (入館は16:30まで)
休館日 毎週月曜日
※7月20日(月)は開館し、翌日21日(火)が休館となります。
※9月21日(月)は開館します。

●自然講座「葉っぱで音をかなでよう」

日 時：7月25日(土) 10:00～12:00
場 所：博物館内
講 師：金田 正氏 (ちば里山草笛音楽隊) 他 3名
対 象：小学生以上 (小学生は保護者同伴)
定 員：30名 (先着順)

●自然観察会「植物園の葉っぱを観察しよう」

日 時：8月9日(日) 10:30～12:00
場 所：国土科学博物館筑波実験植物園 (現地集合)
講 師：堤 千絵氏 (国立科学博物館筑波実験植物園)
対 象：小学生以上 (小学生は保護者同伴)
定 員：30名 (抽選)
参加費：別途、筑波実験植物園の入園料が必要です。

●自然講座「葉っぱと虫の関係」

日 時：8月22日(土) 10:00～12:00
場 所：博物館内
講 師：今野浩太郎氏 (農業生物資源研究所)
対 象：小学生以上 (小学生は保護者同伴)
定 員：40名 (先着順)

昨年度、開館20周年を迎えた当館では、今後大きく変化する社会情勢を鑑み、更なる進化を目指す博物館としての枠組みを、中期計画2015として示しました。その内容について4回シリーズで紹介したいと思います。その1回目は、教育普及についてです。

本計画の三本柱のひとつに、「地域に根ざした博物館」があり、それを達成するための具体策として、「地域の人材育成を目指した事業の展開」を設定しました。ここでは、その中で中高生と高齢者に目を向けた2つの事業について紹介します。

【ジュニア学芸員育成事業】

本事業では、自然に関する研究や博物館での活動に関心をもつ中高生に積極的な活動の場を提供する役割を果たしています。高校を卒業して活動を終えたOBが100人を超え、ジュニア学芸員として行った研究をきっかけとして、大学等で自然科学や博物館学に関する研究を行う人材も育っています。

活動内容として、新規参加者向けの養成講座では、ジュニア学芸員としての活動に必要な技能を身につけるために、自然調査活動、資料収集活動、教育普及活動について実践的な研修を行っています。認定済みの継続参加者に対しては、各分野の学芸員の支援を得な



ジュニア学芸員の活動

がら、個々のニーズに応じた活動を行っています。

今後は、OBと現役ジュニア学芸員との交流、姉妹館である口サンゼルス郡立自然史博物館との交流・連携を行い、ジュニア学芸員の視野を広げ、世界を舞台として活躍する人材の育成を進めます。

【シニア向け自然大学】

社会が高齢化する流れのなかで、高齢者向けのイベントを充実させることは、生涯学習施設としての大切な役割であり、博物館の使命のひとつでもあります。

そのため当館では、昨年度から、自然についての造詣を深めたいと考えているシニア向けの連続講座をはじめました。本事業では、高齢者の知的好奇心を満たすとともに、地域の指導者として活躍できる自己実現の場を提供することもねらいとしています。

活動内容としては、「身近な自然」を共通テーマに、当館の学芸員が自らの研究成果を生かしたレクチャーを行い、3回の講座すべてに参加された方には、修了証を発行します。今年度前期に実施を予定している講座は以下の通りです。（教育課 青木賢一）

- 5月15日（金）海は生きものたちの宝庫！
- 7月17日（金）茨城の変形菌
- 9月18日（金）恐竜時代の海の生きもの



シニア向け自然大学

守り神

今年、最初に野生のヘビをみたのは、4月22日で午前11時頃であった。菅生沼の細流の枯れ草の中から泳ぎだし、20秒ほどで対岸の水辺の草むらに消えた。一緒に目撃した85歳の先輩によればシマヘビで体長1メートル弱、若い個体とのことであった。この先輩の屋敷内にはシマヘビの母子が住み着き、母親は大きく、めったにみることはないが、子ヘビはよくみかけるとのことである。穀物を貯蔵する納屋に住み着いた

アオダイショウは、ネズミ退治のため昔は大事にされた。しかし、屋根が藁葺きから瓦葺きになったため、ヘビが瓦を持ち上げ通り道とすることで雨漏りの原因となり、今は歓迎されない。

釣り好きの私は、草地・水辺を歩くことが多いがヘビに出会うことは年に一度ぐらいしかない。めっきりヘビが減ってきた。この生態系にとって大事な働きをする生物の減少は、ネズミの繁殖等に連動する。豊

館長コラム by director SUGAYA

作の守り神と思って大切にしたい。



イラスト：池上侑花(ミュージアムコンパニオン)

みなさんは、ダジック・アースという言葉を知っていますか。ダジック・アースとは、地球や惑星についての科学を楽しむために、学校や科学館、家庭で、地球や惑星を手軽に立体的に表示するプロジェクトです。京都大学大学院理学研究科の地球科学総合部可視化グループが中心になって進めています。

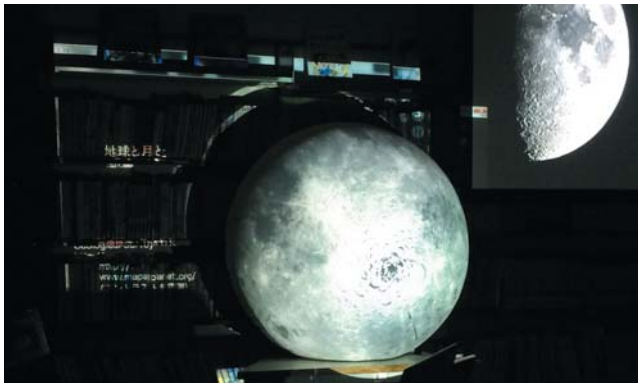
仕組みは簡単で、球形のスクリーンに、プロジェクターで地球や惑星を投影します。通常のパソコンとプロジェクターを使うので、手軽に立体的な地球や他の惑星、衛星などを表示できます。地球などの立体的なものを平面に投影すると形が歪みますが、球に投影することにより正しい形で表すことができます。また、マウスなどのコントローラーで自由に回してみることができます。スクリーンは表面が白く丸いものなら、半球でも全球でもよいので、例えばバランスボールや提灯、傘などでも代用できるのがとても面白いシステムです。

昨年度、博物館では、ダジック・アースの貸出機材を一式借用して、講師派遣の際に利用してみました。いくつかの小学校で星空観察会のレクチャーに取り入れ、普段みることのできない月の裏側をみたり、木星を北極側からみたりしました。子どもたちからは歓声

があがり、興味関心が高まったようでした。児童の感想に、「月の表と裏があんなにちがうと思わなかった」「本物みたいで驚いた」などの声があり、天体に対する学習意欲が向上したことがうかがえます。先生方からは、ぜひ授業で使ってみてほしいという声を聞くことができました。

また、博物館では、今までに2回の企画展でこのダジック・アースを活用しました。平成25年度の第59回企画展「ジオ・トラベル in いばらき - 5億年の大地をめぐる旅 -」では、中生代ジュラ紀から現代までの海洋プレートの移動についての展示で、つい先日まで行われていた第62回「マンモスが渡った橋 - 氷河期の動物大移動 -」では、現在の地球における氷床や海氷のようすから地球環境を考える展示に活用し、来館者から好評をいただきました。

博物館では、このプロジェクトと学校を結ぶ架け橋になればと考えています。例えば、小学校の月の授業の導入で取り入れたり、中学校の気象の授業で台風・ハリケーンなどの発生場所と海面温度のコンテンツを使用したり、活用場面は多様です。今後、教育用貸出資料に加えていきたいと考えていますので、その際にはぜひご活用ください。（資料課 諸橋靖子）



星空観察会のレクチャーで使用



企画展での展示のようす

アンモナイト

アンモナイトという言葉を知って、太古の生きものだとご存知の方も多いいと思います。アンモナイトは中生代に大繁栄して、今から約6600万年前に恐竜たちとともに絶滅しました。

アンモナイトは綺麗な渦巻き状の殻の化石として発見されます。この殻の形は巻き貝のようにもみえますが、イカやタコと同じ頭足類というなかまで。その形や大きさはさまざまで、なかには巻きがほどけたり、

伸びたりと、変わった巻き方をしているものもあります。それらは、環境に合わせて多様に進化した結果だと考えられています。

アンモナイトの化石が埋もれていた周囲の地層から影響を受けて宝石のように輝くようになったものや、殻の成分が黄鉄鉱という鉱物に置き換わったものもあります。当館の第2展示室にもたくさんのアンモナイトの展示があります。来館の際には、ぜひご覧ください。

小さな発見 - ミュージアムコンパニオン -

(ミュージアムコンパニオン 菊地杏奈)



いろいろなアンモナイト

小笠原コケ紀行

学芸員からの報告 2

2015年3月末、世界自然遺産である小笠原諸島を訪れました。小笠原で活躍されている自然ガイドのみなさんを対象にコケの講習を行うという依頼を受けたためです。大役を無事果たせるが緊張しつつ、人生で3回目の小笠原への旅がはじまりました。

小笠原へ行くには、船を使うのが唯一の手段です。片道25時間30分の船旅を経て小笠原諸島の父島に到着し、すぐに約50km離れた母島に船を乗りかえて向かいます。この船上で、さっそく小笠原らしい自然に触れることができました。ザトウクジラとハシナガイルカの群れに出会うことができました。繁殖期であるこの時期には、小笠原周辺でザトウクジラに出会うことは決して珍しいことではなく、潮を吹く姿を数回観察することができました。ハシナガイルカはジャンプを繰り返しながら船のすぐ近くまで接近し、私を含む乗船客から大きな歓声が上がりました。

母島に到着した翌日、いよいよ講習の日になりました。小笠原諸島は「東洋のガラパゴス」ともよばれ、独自に種分化した固有の動植物が数多くみられます。コケも例外ではなく、これまで知られている171種（亜種・変種などを含む）のうち11種（6.4%）が小笠原諸島の固有種です。小笠原諸島の山地ならどこに行っても目にすることができるムニンシラガゴケとコヒノキゴケはどちらも小笠原でしかみることができない固有種です。しかし、興味深いことに維管束植物の固有種率は約40%といわれ、コケと比べると非常に高い割合です。コケの胞子はとても小さく風に乗って遠くまで飛ぶことができるため、世界的に広域に分布する種が多く知られます。このようなコケの特徴が、固有種率の低さの理由かもしれません。座学でこんなお話をした後、9名のガイドのみなさんと母島最高峰の乳房山に向かいました。すぐに、民家のわきでギンゴケやハリガネゴケの大群落を見つけました。これらの

種は、本州にも多い普通種です。たとえば小笠原といえど市街地では似たようなコケが出てくるのだなと感心しながら観察しているうちに、10分程度のはずの登山口までの道のりに30分かかり、だんだん予定は狂いはじめました。山に入ると、どんどん増えるコケに足は止まりがちになり、山頂で昼食をとるはずが、だいぶ下で昼食の時間になり、山頂に到着したのは午後2時過ぎ。山頂でしかみることのできないオガサワラキブリツノゴケなどを観察し、帰りは急ぎ足になりましたが、コケの世界を一日堪能することができました。翌日は、講習のお礼にと、ガイドの同行なしでは入ることのできない堺ヶ岳をご案内いただき、ずっとみだかったゼニゴケシダなどに出会うことができました。

2日後、父島での講習には40名もの方にご参加いただき、小笠原のコケの特徴や、コケの不思議な体のつくりをお話ししました。室内のみの講座でしたが、コケを実体顕微鏡やルーペで観察するコーナーも設けたところ、「きれい!」という感嘆の声が多く聞かれて嬉しい時を過ごしました。何度行っても新鮮な感動を与えてくれる小笠原。その大好きな場所でコケの魅力を伝える機会を与えてくださった皆様に、この場を借りて深く御礼申し上げます。（資料課 鷗沢美穂子）



小笠原固有のコヒノキゴケ

ミズカマキリ

みなさんはミズカマキリをみたことがありますか。ミズカマキリは、5月～10月ごろになると水田や用水路などで、水草や枯れ木に身をまぎれさせて生活しています。

ミズカマキリは、タガメやタイコウチと同じカメムシ目のなかまですが、姿形がカマキリに似ていることからその名前がつけられました。体は、マッチ棒程度の太さで、その細い体からは、カマキリのような強者の印象はうけません。

水槽内でのようすは、枝につかまりジッとしていて気づかれないこともあるほど、日頃あまり動きません。しかし餌を捕らえるときは一転、鎌状の前脚を垂直に立て狙いをさだめます。そして、獲物が近くまでくると、その脚を振りおろし一瞬で捕まえてしまうのです。その姿はまさに水中のカマキリといっても過言ではありません。

来館の際は、ぜひ、ミズカマキリの姿をご覧になってください。

おさかな通信

(水系担当 武藤 唯)



ミズカマキリ 体長4～5cm

第4展示室に昆虫の新展示

新展示紹介

2015年4月、第4展示室に昆虫がやってきました。以前の「ミクロの体内探検」という人体内を探検する映像展示が、多くの昆虫標本が並び展示と映像のコーナーにリニューアルしました。「昆虫のからだのつくり」をテーマに、昆虫のからだの基本的な構造と多様な昆虫のグループ、美しい色彩や斑紋の昆虫、葉やほかの動物に擬態する昆虫などを多くの標本で紹介しています。並んでいる標本の数は、328点と当館の常設展示では最も大きな昆虫展示コーナーとなりました。これまでも、昆虫好きの少年から「たくさんの昆虫がみたい」との声をいただくこともありましたので、ご期待にお応えできていれば幸いです。

展示制作者として最も力を入れたのは、多様な昆虫のグループ(目)の紹介です。昆虫としてからだの基本

構造は同じですが、みたくは大きく異なります。多くの種類がいるグループをいかに配置するかは悩みどころで、何回も試行錯誤しました。また、美しいチョウ類では、ケースから飛び出しそうな光り輝くモルフォチョウは目をひきますが、私たちの身近にいるチョウにも美しいものがたくさんいるということに気づいていただければ嬉しいです。擬態のコーナーでは、枯れ葉に紛れている昆虫探し、目玉模様のあるフクロウチョウやユカタンビワハゴロモなど、みたくに楽しい昆虫も紹介しています。展示の制作にあたっては、使用する標本の準備や整理をジュニア学芸員の広瀬大輔さんや新妻凜生さんが手伝ってくれました。映像が流れているブースには、昆虫を拡大してみるができる装置を設置しますのでご期待ください。(資料課 中川裕喜)



新展示「昆虫のからだのつくり」のコーナー



身近な美しいチョウ類

恐竜は生きている

なるほど博物館

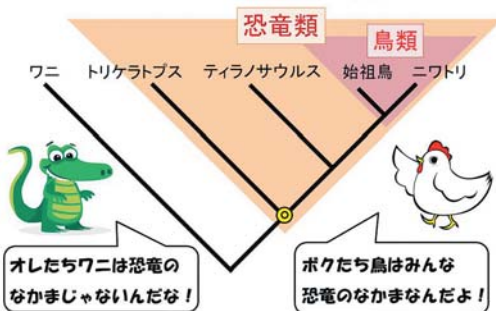
このコーナーは、自然に関する最新の情報を、わかりやすくお伝えするコーナーです。

みなさんは生きている恐竜をみたことがありますか。恐竜の肉や卵を食べたことはありますか。私たちは生きた恐竜をみたことがあるし、その肉や卵をよく食べていますといったら、みなさんは、驚くことでしょう。じつは、現在生きている鳥はすべて恐竜の子孫であり、分類学的にまぎれもなく恐竜のなかまです。つまり、私たちが肉や卵を食べているニワトリ、街中でみかけるカラスといった鳥たちは、すべて恐竜の生き残りなのです。

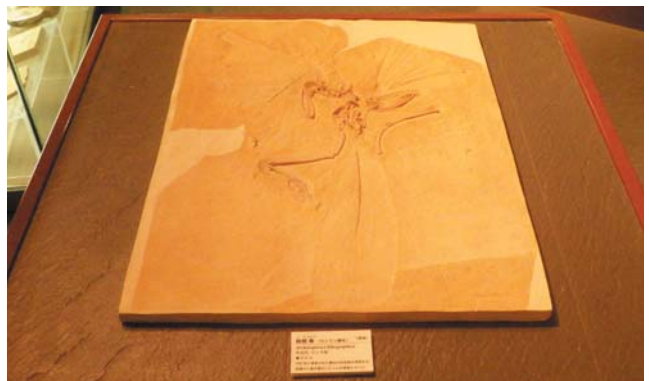
1861年に始祖鳥の化石が発見され、鳥は恐竜から進化したと考えられるようになりました。そして1995年以降には中国などから羽毛をまとった恐竜の化石が続々と発見され、今では羽毛を生やした恐竜の一部が鳥へと進化したことは定説となっています。

現在の地球上に鳥類は約10,000種が存在していますが、哺乳類は約4,500種です。まだまだ地球は恐竜たちの天下だといえますね。(資料課 加藤太一)

恐竜＝「ニワトリとトリケラトプスの直近の共通祖先
◎から進化したすべての生物」



恐竜と鳥の系統関係の略図



第2展示室の始祖鳥(恐竜的な特徴を残す原始的な鳥)化石の複製標本

トピックス

○入館者900万人を達成!!

2015年3月28日(土)の午前、当館の入館者が900万人に達しました。1994年11月の開館以来、20年と約4か月での達成です。

記念すべき900万人目のお客様となったのは、東京都江東区から家族5人で来館した谷岡知優さん(6歳)です。記念式典では、菅谷博館長から900万人目の入館証明書が授与され、さらに小野寺俊茨城県教育長と助川幹夫博物館友の会会長から、マンモスのぬいぐるみなどのミュージアムグッズやレストランのお食事券がプレゼントされました。続けて行われた記念植樹では、ハナミズキを植えました。知優さんは毎年当館を訪れるのを楽しみにしているといい、「びっくりしたけど嬉しい。花や恐竜の化石をみるのが楽しい」といった感想をいただきました。4月に小学校入学を控え、よい思い出になったとのことです。

当館は、これからも950万人、1,000万人のお客様をお迎えし、皆さまに楽しくすごしていただけるよう、いろいろな活動をしていきます。博物館へのご来館をお待ちしております。(企画課 沼尻耕一郎)



記念式典のようす

○葉っぱアートをつくろう

平成27年5月23日(土)に、自然講座「葉っぱアートをつくろう」が開催されました。この講座は7月4日から開催される第63回企画展「葉っぱ展—個性豊かな葉っぱとその恵み—」の開催に先立ち行われ、参加者のみなさんが作った作品は、「葉っぱ展」の中で写真パネルとして紹介する予定です。講師である栗林孝之さん(グラフィックデザイナー&枯葉アーティスト)は全国各地の幼稚園や小学校などで、自然素材を利用したアート活動を行っています。今回の講座でも博物館の野外に落ちていた、たくさんの色とりどりの葉っぱ、落ちた枝、木の実を使用しました。

参加者のみなさんは栗林さんの説明を参考に、それぞれ工夫を凝らし、葉っぱの色や形を上手に利用しながら、クワガタやカブトムシなどの昆虫、魚、鳥、マンモスなど思い思いの作品を楽しそうに作っていました。

参加者のみなさんが作った作品を葉っぱ展でぜひご覧ください。(教育課 小泉直孝)



葉っぱアートをつくろう

○記念写真撮影機を設置しました

みなさんは、博物館にいらした時にこの迫力・感動を記念に残したいと思ったことはないでしょうか。しかし、カメラでは撮りきれないのでなんとかないかと考えていませんか。

そこで、4月から、新しい入館者向けサービスとして、博物館友の会で記念写真撮影機(通称:シャグー)を設置しました。設置場所は、野外出入口(ミュージアムショップの外)となります。

このサービスは、撮影機に用意された博物館の展示物等の写真8枚から1枚を選び、そのなかにお客様ご自身の写真を写し込むというものです。常設展示の松花江マンモス、ティラノサウルスをはじめ、季節に依りての野外施設、今後開催される企画展に合わせて写真が用意されます。選んだ写真に合わせて、いろいろな表情を演出できます。さっそくご利用いただいたお客様に感想を聞かせていただいたところ「迫力がすごい」や「かわいい」とのことでした。日付も入りますので記録にも最適です。

大きさはポストカードサイズですので、52円切手をは貼れば、郵便物としてポストに投函することもできます。1回のご利用料金は500円(税込)です。ご来館の際はぜひお試しください。(企画課 中里 賢)



設置された記念写真撮影機

古東京湾の貝化石を探しに行こう！



熱心に貝化石を採集する参加者



採集した貝化石をもって記念撮影

5月24日(日)、第62回企画展「マンモスが渡った橋ー氷河期の動物大移動ー」の記念イベントとして、自然観察会「古東京湾の貝化石を探しに行こう！」を行方市谷島で開催しました。

当日は晴天のなか、30名の参加者でイベントを実施しました。約12万5000年前の温暖な時期には海水面が上昇し、今よりも内陸に海水が浸入しました。このときにできた内湾を古東京湾といいます。今回のイベントはこの時期に生息していた貝の化石を観察し、採集も行いました。また貝化石だけでなく、露頭にみられる堆積構造を観察し、当時の環境がどのようなものだったのかについて考えました。メガリプルやハンモック状斜交葉理などいろいろな堆積構造をみることで、当時の環境を推測することができました。

貝化石の採集と名前を調べる同定作業では熱心に活動する姿がみられました。ある方は特定の種類の化石をねらって採集し、またある方は採集した貝化石を標本や図鑑で照らし合わせながら同定する姿がみられま

した。トウキョウホタテは絶滅種で、現在は生息していませんが、今回のイベントではたくさんの方がこの貝を採集することができました。

参加者からは「古東京湾の地層を興味深く感じ、昔の湾のようすが想像できるような気がしました」「博物館内の化石掘りとはまったく違った醍醐味を味わいました」「地層のメガリプルやハンモック状斜交葉理などはじめて意識してみることができ、自然の不思議を感じました」などの感想がよせられました。

貝化石を観察するだけでなく、化石や堆積構造から当時の環境を考えるよいきっかけとなったようです。

(教育課 相田裕介)

編集後記

4月に赴任し、本誌の編集に携わらせていただきました。編集の際には、各記事を担当する職員の代わりに触れ、細部にわたって校正をかさねました。そのかわりは、本誌を手にとったみなさまに、よりよい情報をお伝えする情熱だと思います。私も、情熱をもって編集にあたってまいりますので、今後ともよろしくお願いたします。(Y. T)

【交通案内】



＜車ご利用の場合＞

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
 - 鉄道・バスご利用の場合
 - 東武アーバンパークライン(野田線)愛宕駅下車
～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
 - つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅
下車～関東鉄道バス「岩井/バスターミナル行き」
乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- ※事前に発車時刻等をご確認ください。



【開館時間】

9:30から17:00まで
(入館は16:30まで)
※ペット、遊具、テ
ブル、椅子及びテン
ト等のお持ち込みは
ご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設 のみ	年間 パスポート
	企画展開催時	通常時		
一般	740円 (600円)	530円 (430円)	210円 (100円)	1,540円
高校・大学生	450円 (310円)	330円 (210円)	100円 (50円)	1,030円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	310円

(注):()内は団体料金(20名以上)
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。
次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日)
- 6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日)
- 3月20日(春分の日)
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間を除きます。)

【休館日】

- 毎週月曜日
- ※6月15日(月)～6月20日(土)館内整理のため休館となります。
- ※7月20日(月)は開館し、翌日が休館となります。
- ※9月21日(月)、22日(火)、23日(水)は開館し、9月24日(木)が休館となります。

